

言葉のイメージはあらかじめ定めるの意味。

ポイントー 手相で言葉取り出し方式は、明瞭。

- (イ) 上級で言葉取り方式は明瞭に意識から。
- (ロ) あつちり明瞭に言葉のイメージをあらかじめ定めてから。

【手掛かりー】

当流の見方を是とされる方々に、なお上級クラスのサブライズとの段となります。え、前置きはそれくらいに・・・ですが。最大のポイントは、「あらかじめ定める」と「あらかじめ定める」にあります。では、あらかじめ続けます。そこに線がある。そこに自然がある。

言葉への変換には、そのようにそつとあらためて定める。そのようにそつとあらためて定める。さて、「イ」と「ロ」に示したように手相において、明堂（手の平中央の部位）に言葉のイメージに感じ取れるような動き（働き）をお願いしておく（意識する）にあります。なんと言いましても、言葉への変換が、当流の神髄（定めがたい奥深さ）としているところですから。と同時に、麻衣先生の先人の偉業の意図を継承することでもあります。

(NS1)

相有「前定」の「前定」と有に注目。

(NS11)

「前程序奏」は前程の事に注目。

(NS111)

「謀無」は通の「通」は通の謀の、に注目。

まず取り上げたいのは、「有」の字の意味に「空間の中にある形をこめて存在している」を問題にしたいわけです。易で言えば、時（時空）と兆（微）しを探るに通じるべきでしょう。次は「亨」の字の意味の「さわやかな上下に通じる」（天地）に注目です。次は「謀」の字の意味には、「分から

ない先の打つ手を探る」は、なぜここで、この字かを問題にしたいわけです。自然にお尋ねし、自然との対話は、言葉の変換に通じ、手の内を探ること、言葉のイメージから、最上のエッセンスを感じることに。この恩恵は、既に街頭で占いをしていた時代、まだまだイメージ変換が拙くても、しががない街易者として食べてこられました。そこで、ここでは手相でも見えます、とします。これまでの「鑑定日記より」などを、あらためて参考にして頂ければ幸いです。

— つづきは、あつちあつち。 —

(MSG1)

白黒の世界と違ってトマワ。

(MSG11)

せつかく言葉のイメージに近い、あるいは、らしい振る舞いの何かが動く(雲のようでも)とします。

(MSG111)

そこで一点突破の気持ちに、何なりと言葉の世界を考えて遊んで下さい。

【手掛かり2】

スタンバイと前定であり、設定になります。手相の場合で言えば、明堂を意識することになります。この明堂は、手の平の中央であります。ことに、言葉の変換のイメージの場合は、大きく円を取って下さい。その大きな円の下に小さなお尋ねの種を用意する段取りになります。そのまた質問(お尋ね)の種火なるもので、上の大きなマルのスクリーンを意識して、答えを大きなマルに求めるわけです。これをテコで押すようにとか、マツチで点火するかのようでも表現しましょうか。ただし一瞬です。「見つめれば見えない」の世界であります。例えば、馬にバケツを用意しても、飲むのは馬です。後は稽古あるのみです。

(備考欄)

なお、せめて初段級までは・・・と思われる方は稽古台になりますので、当方までお知らせください。日々のちょっとした出来事にも役に立つ、この上ないものになります。まして、一生ものと思えば・・・です。

「財を埋め、辞を正す」を考えてみる。

【ポイント】 理は正しい理念と、人間性の追求にあること。

- (イ) 経営力は正しい理念と人間力から。
- (ロ) 人間力は義の真妙さと透明さから。

【手掛かり①】

真妙さとか、玄德さと言えば、それは利とか財とかは遠ざかると思われるかも。まして義とかの言葉を出してくれば……。

(その1)

真妙さには、素直さの深さが分かる人。

(その2)

玄德さには、天地の原理、徳を知る人。

(その3)

義とは、利だけを追求せず、透明度ある人。

基本に人間学なくして、生々発展なく、そこに種子あって感じる力があってこそ。「神気澄清」は人相学的見地からでは、役に立つことの追求と学びが神に入る、感じるとも言えます。これは一つの相です。ですから真妙にも玄德にも感じる相に。このような相の人は、経営者、一芸の人に、名人達人級の人に、学者に、成功者に、替の名士にと、キリがないほどにいます。また、平凡な、普通風にも光っている人もいますので、見落としのないように。

《蔵出しメモ》

毎度、引き合いにしている街易をしていた頃の話です。まだまだ修業中のしがない街易者に「感じ入った！よく当たる、その通り。」と、こちらのほうが頭が下がる思いです。実に物分りの良い人です。鑑定したことは、このお客様の見識のその先の事、つまり二つのうち一つの会社の件でした。そこで「この会社は入社してから、それほどでもない、以前の魅力がないことになる」と。すると「そう思っていたので、ありがとうございます」でした。

《蔵出しメモ2》

「冷暖自知」という禅語があります。相学においても実践です。見ているだけでは「冷たい」「暖かい」か、分かりません。そこで「動く」「じじが普通ですが、当流では「感じる」を旨とします。「感じる」とは手相の場合は主として手の平の中央の明堂の明暗になります。そこで、まだ修業中の話をします。この時代は人相で見る印堂（眉と眉の間）を、師に手相の明堂に映しても見える、の一言からの特訓になりました。お客様の質問を前提にして、設定は尋ねやすい言葉にして、明堂にお尋ねするやり方、見方です。その時に是非か、明は吉で、暗は凶になり、ちなみに冷は陰で、暖は陽です。明堂が尋ねた一瞬に明か暗かの感じを探るわけで、察するわけです。当流は明暗を基調にして、光がより感じられるか、影に見えるかであり、この明暗の白黒は上級クラスになれば、イメージにパターンに、雲の流れのように見ると言うか、感じるようになります。今回のお客様の場合は、手相での明堂に「見掛け倒しのな」白黒での雲のようなものが流れ、それはイメージ風にもとれるし、パターンをとれるように動いたともとれました。そこで、前記のようにお客様に、「入社したら、自分から色あせてしまうのでは？」と解釈したわけです。修業中の身に見してみれば、とりわけ嬉しい思い出となっています。